

畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区

小黒南原・伊勢並遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1992. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

畑地帯総合土地改良事業伊那西部地区

小黒南原・伊勢並遺跡

埋蔵文化財緊急発掘調査報告書

1992. 3

上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

序

このたび、畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区が実施されるにあたり、小黒南原・伊勢並遺跡の緊急発掘調査を実施いたしました。

この事業は、道路の拡幅と灌漑用水パイプの設置であり、調査方法や範囲に制限もありましたが、これから調査・研究の発展に大変貴重な資料を得ることができました。

近年において開発事業などの数は増加の一途をたどっている中で、埋蔵文化財の保護につきましては、現状での保存がいちばん望ましい方法なのでありますが、大変むずかしい問題となってきております。私たちは、発掘調査の結果を記録保存という形で残し、先人達が遺した貴重な人類の足跡を後世に伝えていかなければなりません。

今回の発掘調査にあたり、県教育委員会文化課及び上伊那地方事務所職員の方々のご指導をいただき、発掘調査団長の友野良一先生をはじめ、調査員の先生方、作業員のみなさんのご努力により、ここに無事報告書を刊行するはこびとなりました。ご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げるとともに、この報告書が今後教育文化の向上に活用されることを願っております。

平成4年3月

伊那市教育委員会

教育長 宮下安人

例　　言

1. 本書は、平成3年度に実施された畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区に伴なう、埋蔵文化財緊急発掘調査の報告書である。
2. この緊急発掘調査は、上伊那地方事務所の委託により、伊那市教育委員会が遺跡発掘調査団を編成し、発掘調査団に事業を委託して実施した。
3. 本書の執筆者及び図版製作者は次のとおりである。

本文執筆　友野良一・松島信幸・寺平 宏・早川 宏

図版制作　友野良一・寺平 宏・松島信幸・早川 宏

写真撮影　友野良一・寺平 宏・早川 宏

4. 本書の編集は、主として伊那市教育委員会が行った。

5. 出土遺物及び実測図類は、伊那市考古資料館に保管してある。

目 次

序
例 言
目 次
挿図目次
表目次
図版目次

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過.....	1
第2節 調査会の組織.....	1
第3節 発掘調査の経過.....	2

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置.....	4
第2節 周辺の遺跡分布.....	5
第3節 地形及び地質.....	11
第4節 歴史的環境.....	33

第Ⅲ章 調査

第1節 調査の概要.....	36
第2節 遺構と遺物.....	36

まとめ.....41

あとがき.....42

参考文献.....42

図 版

挿 図 目 次

第1図	遺跡の位置	4
第2図	周辺の遺跡分布	7
第3図	小黒川扇状地全体図	11
第4図	西町の小黒原面中央部の工事現場のテフラ (No.5 地点)	13
第5図	西町の小黒原面中央部のトレンチにおけるテフラ柱状図及び鉱物組成 (No.4 地点)	14
第6図	西町の小黒原面、小黒川断層東側におけるテフラ柱状図及び鉱物組成 (No.3 地点)	15
第7図	小黒原面中央道の上、小黒川左岸に面した道路沿いの露頭におけるテフラ柱状図及び鉱物組織 (No.1 地点)	16
第8図	城南町、下水道工事の溝における柱状図及び鉱物組成 (上 No.9 地点)、(下 No.8 地点)	17
第9図	小黒川扇状地東部の西町地区の地形面	18
第10図	小黒川扇状地の小黒原面と小黒川断層との関係	19
第11図	城南町西町断層の露頭スケッチ (写2と同じ場所)	21
第12図	小黒川断層による河谷のオフセット	22
第13図	小黒川断層西町露頭見取図 (羽田野原図1976)	23
第14図	小黒川断層西町露頭の南側壁面の観察スケッチ	25
第15図	小黒川断層西町露頭の南側壁面における①～⑩の鉱物分析結果	27
第16図	小黒川断層による撓曲崖の復元図	28
第17図	断層がつくった段丘地形	32
第18図	狐塚北古墳・八人塚古墳実測図	34
第19図	調査範囲位置	35
第20図	小黒原面地区調査範囲	37
第21図	伊勢並地区調査範囲(1)	38
第22図	伊勢並地区調査範囲(2)	39
第23図	伊勢並地区出土石器実測図	40

表 目 次

表 1	資料採集及び調査地点の一覧	12
表 2	小黒川断層による河谷の水平変位量	22
表 3	小黒川扇状地における小黒川断層による垂直変位量	23

図 版 目 次

図版 1	上 小黒南原地区 下 伊勢並地区
図版 2	小黒南原地区 上 A-1 トレンチ（南から） 中 B-1 (1) トレンチ（北から） 下 B-1 (2) トレンチ（南から）
図版 3	伊勢並地区 上 A-1 (1) トレンチ（西から） 中 A-1 (1) トレンチ（東から） 下 A-1 (2) トレンチ（西から）
図版 4	伊勢並地区 上 A-1 (2) トレンチ（東から） 中 A-2 トレンチ（西から） 下 A-2 トレンチ（東から）
図版 5	伊勢並地区 B-1 トレンチ（西から） A-3 トレンチ（東から） A-3 トレンチ④部分断面
図版 6	伊勢並地区 上 A-4 トレンチ（西から） 下 A-4 トレンチ⑤部分断面
図版 7	伊勢並地区出土遺物
図版 8	上 狐塚北古墳 下 狐塚南古墳
図版 9	上 八人塚古墳 下 八人塚古墳

- 図版10 上 横手道からの切り通し口
下 切り通しより北方を望む
- 図版11 上 春日街道といわれている横手道
下 小黒川左岸段丘に上がったとされる場所

第Ⅰ章 発掘調査の経緯

第1節 発掘調査に至るまでの経過

- 平成2年9月 煙地帯総合土地改良事業伊那西部地区に係わる埋蔵文化財の保護協議を行なう。出席者は、長野県教育委員会、上伊那地方事務所、伊那市文化財審議委員、伊那市教育委員会。
- 平成3年1月 煙地帯総合土地改良事業伊那西部地区に係わる埋蔵文化財発掘調査を平成3年度文化財関係補助事業として、計画書を提出。
- 5月 平成3年度文化財関係国庫補助事業計画の内定。
- 平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付申請書の提出。
- 9月 平成3年度国宝重要文化財等保存整備費補助金交付決定通知。
- 11月 煙地帯総合土地改良事業伊那西部地区埋蔵文化財包蔵地発掘調査委託契約を締結。

第2節 調査会の組織

伊那市教育委員会

委員長 下平繁
委員長代理 金原信郎 (兼子康彦)
委員 赤羽芳雄 (小田切仁)
委員 中村伸員 (岸敏子)
教育長 宮下安人
教育次長 有賀博行

事務局 小田切修 (社会教育課長)
林俊宏 (社会教育係長)
渋谷勝 (青少年教育係長)
浦野節子 (社会教育係)
城倉三喜生 (社会教育係)
早川宏 (社会教育係)

○発掘調査団

団長 友野良一 (日本考古学协会会员)

調査員 松島信幸 (第四紀学会会員)

寺平宏 (第四紀学会会員)

小木曾清 (東洋陶磁学会会員)

作業員 埋橋程三 大久保富美子

大野田英 酒井とし子

小田切守正 柴佐一郎

井上昌 上島正延

池上大二 酒井幸子

第3節 発掘調査の経過

月・日	日誌
12. 9	発掘機材を伊那市考古資料館より運搬し、現場へ搬入する。午後テントの設営をし、道路拡幅部分についてのトレーナー及びグリット設定の打ち合わせを行なう。
12. 10	小黒南原地区において、A-1トレーナーの設定をする。A-1トレーナー南側にはグリット(G-1~4)を設定し、掘り下げをする。午後B-1トレーナーの設定をする。
12. 12	朝方からの雪のため、午前中テントの補強を行なう。午後、A-1トレーナーの断面実測を行なう。
12. 13	B-1トレーナーの掘り下げと、平面実測と断面実測を行なう。
12. 16	トレーナーの埋め戻し作業を行なう。
12. 17	伊勢並地区においてA-1トレーナーの設定をし、掘り下げを開始する。
12. 19	A-1トレーナーの壁面より土器片出土。
12. 20	A-2、B-1トレーナーの設定をし、掘り下げを開始する。
12. 24	A-2、B-1トレーナーの平面実測、断面実測を行なう。
12. 25	A-3、A-4トレーナーの設定をし、掘り下げを行なう。
	A-3、A-4トレーナーの掘り下げをする。

. 26	昨夜の雪を除去し、トレンチ掘り下げと平面実測及び断面実測を行なう。 午後、地質調査グリットNo 1を設定し、サンプル採集をする。
. 27	A-3、A-4 トレンチの埋め戻し作業をする。
1. 6	地質調査グリットNo 2を設定し、サンプル採集をする。
. 10	発掘機材の後片づけをし、伊那市考古資料館へ搬出する。
2.	報告書作成のため整理作業をする。
3.	報告書作成

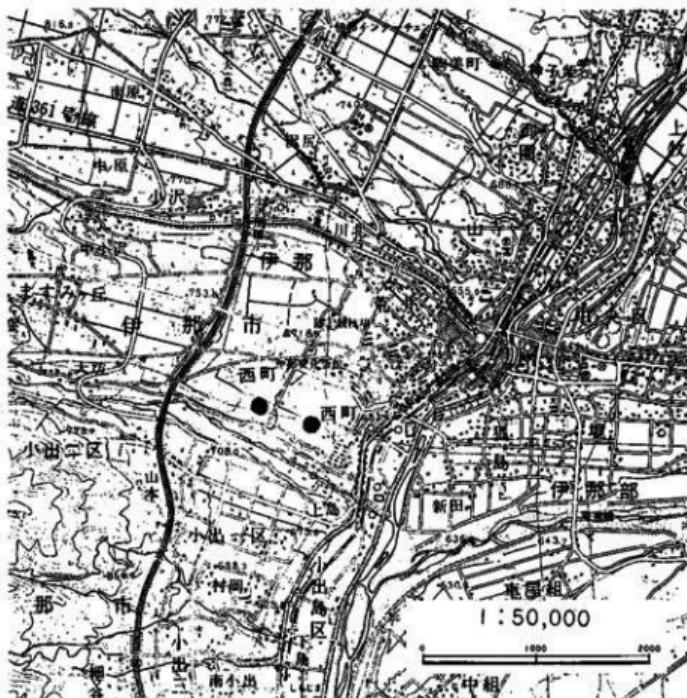
発掘調査に深いご理解とご協力をいただいた方々に心より感謝申し上げる次第であります。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置

小黒南原・伊勢並遺跡は、長野県伊那市西町区小黒地籍にある。遺跡に至るには、JR飯田線伊那市駅前から伊那合同庁舎前を通り、青木町の交差点を左折する。交差点を左折し、400m程行き坂道を上りきると、右手に荒井神社があり、この三叉路を左折し西へ向かう。伊那中学校前を通り、Y字路を左折すると左手に長野県伊那文化会館、右手に長野県伊那労働者福祉センターがある。労働者福祉センター・婦人の家の交差点を左折すると、T字路となる。ここから南側の畠地帯に遺跡が存在する。

遺跡は天竜川右岸、小黒川左岸の台地段丘上に広がる畠地帯に位置している。



第1図 遺跡の位置

第2節 周辺の遺跡分布

本遺跡の周辺には、縄文時代から近世まで各時代の遺跡が分布しており、発掘調査で明らかにされている遺跡もある。各遺跡の概略について列挙すると、以下のとおりである。

1 ますみが丘遺跡

(縄文) 中期土器・石鏃・打石斧

2 赤坂遺跡 (昭48年発掘)

(縄文) 中期土塗・木島式・中期土器・石鏃・打石斧・石匙・削器

3 富士塚

(近世) 塚

4 上の山遺跡

(縄文) 勝坂式・打石斧

(平安) 土師器・須恵器・灰釉陶器

5 伊勢並遺跡 (昭38年発掘)

(先土器) 尖頭器・剥片石器

(縄文) 中期堅穴住居1、格子目押形文・斜縄文・天神山式・木島式・加曾利E式・石鏃・石槍・爪形搔器・打石斧・片刃石斧・磨石・敲石・石匙・石錘・滑石製有孔玉

(弥生) 中期土器・有孔磨石鏃・石包丁

(平安) 土師器・須恵器・灰釉陶器・青銅鏡

6 狐塚北古墳

円墳 径14.40m 高3.00m 横穴式石室

7 狐塚南古墳 (昭50年発掘)

円墳 径14.00m 高2.10m 横穴式石室

鉄鏃・刀子・簪・金環・玉・杏葉・土師器・須恵器

8 八人塚古墳

円墳 径11.00m 高1.60m

9 山の神遺跡 (昭50年発掘)

(縄文) 土塗・早期土器・加曾利E式・打石斧・磨石斧・玉・土錘

(弥生) 土器

(平安) 土師器・須恵器・灰釉陶器

(中世) 陶器(天目)

10 小黒南原遺跡

(縄文) 中期初頭型式・加曾利E式・石鏃・打石斧・磨石斧・石匙・土錘・円石

11 ウガイス原遺跡

(平安) 土師器

12 山本田代遺跡 (昭48年発掘)

(縄文) 中期初頭型式・後期土器・打石斧・磨石斧

(平安) 竪穴住居 6・小竪穴・土師器・須恵器・灰釉陶器・鐵鎌・刀子・鉄具・鐵滓

(中世) 土鍋・陶器 (黄瀬戸・天目)

(近世) 陶器・青銅製品

13 城平上遺跡 (昭47年発掘)

(縄文) 中期土器 (平安) 土師器・須恵器

14 城平遺跡 (昭47年発掘)

(縄文) 竪穴住居 1・中期末・後期・晚期土器・磨石・石棒

(平安) 竪穴住居 8・土師器・須恵器・灰釉陶器・砥石・刀子

(中世) 地下倉 3・小竪穴 2・墓塚 4・内耳土器・陶器 (黄瀬戸・天目・備前)・青磁・石臼・砥石・刀子・ピンセット状鉄製品・釘・火打金具・古錢

15 宮林遺跡

(縄文) 加曾利E式・打石斧・焼石

16 北条遺跡 (昭49年発掘)

(縄文) 中期竪穴住居 8・中期土塙 4・配石 1・勝坂式・加曾利E式・石鎌・打石斧・磨石・凹石・磨石斧・剥片石器・砥石・棒状石器・石錐

(奈良) 竪穴住居 1・土師器・須恵器・陶硯

(平安) 竪穴住居 2・土師器・須恵器・灰釉陶器

17 山本遺跡

(縄文) 中・後期土器・打石斧 (弥生) 土器

18 上島下遺跡

(縄文) 黒浜式

19 上島遺跡 (昭48年発掘)

(先土器) 剥片

(縄文) 前期竪穴住居 2・小竪穴 2・木島式・北白川下層式・黒浜式・諸磯A・B・C式・大歳山式・打石斧・磨石・敲石・石皿・礫器・横刃形石器・棒状石器

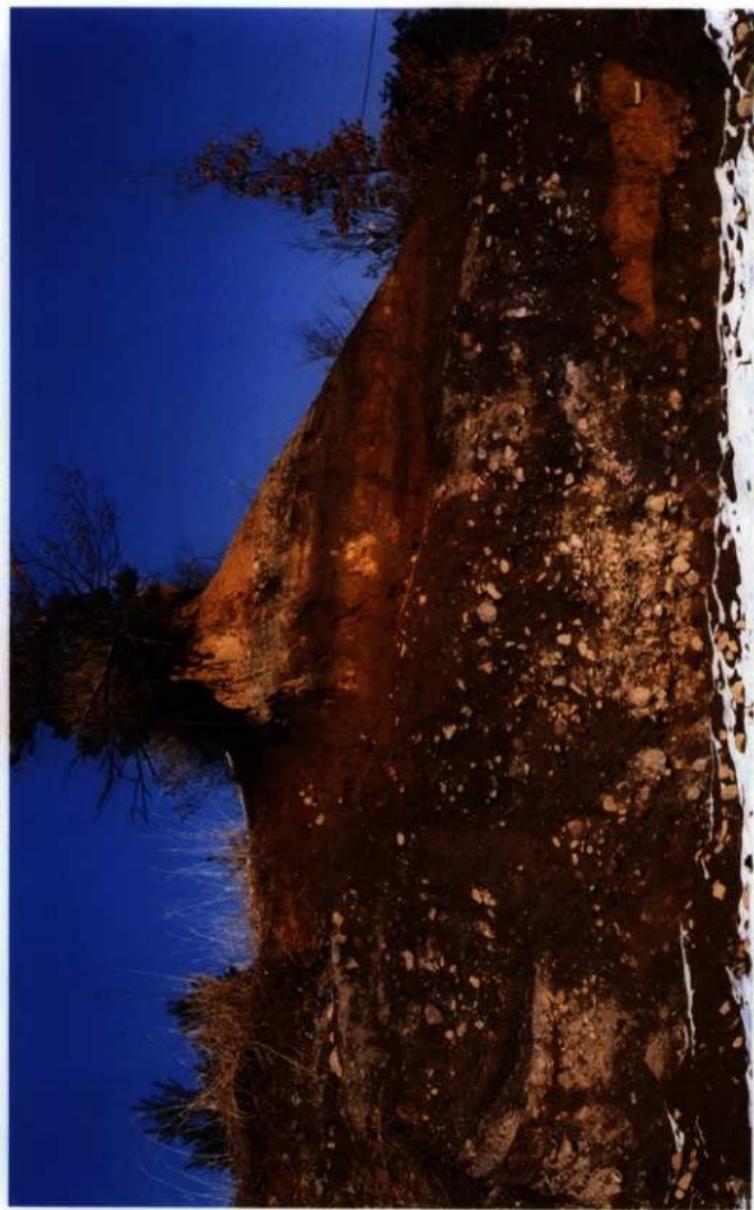
(平安) 竪穴住居 1・小竪穴 1・土師器・須恵器・灰釉陶器



第2図 周辺の遺跡分布



1 小黒川断層西町高頭（第14回参照）





2 小黒川左岸のテフラ層(中央道西、第9図①地点)
礫層の上に約2.8mの新期御嶽テフラが堆積している。



3 西町の小黒原面中央部の工事現場(第9図⑤地点)
礫層の上に約3.5mの新期御嶽テフラが堆積している。



4 小黒原面の新期御嶽テフラ上部層(第9図③地点
のトレンチ)



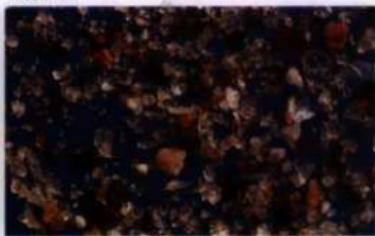
5 写2の地表から深さ60~80cmの鉱物(画面の横の長さは6mm)
新期御嶽テフラの鉱物に姶良Tn火山灰の火山ガラスが混じる。



6 写2の地表から深さ240~260cmの鉱物(画面の横の長さは6mm)
新期御嶽テフラの鉱物や、コーケス状のスコリア粒が混じる。



7 城南町面の断面(第9図⑨地点)
亞角礫層の上に約50cmの砂層や黒土層がみられる。

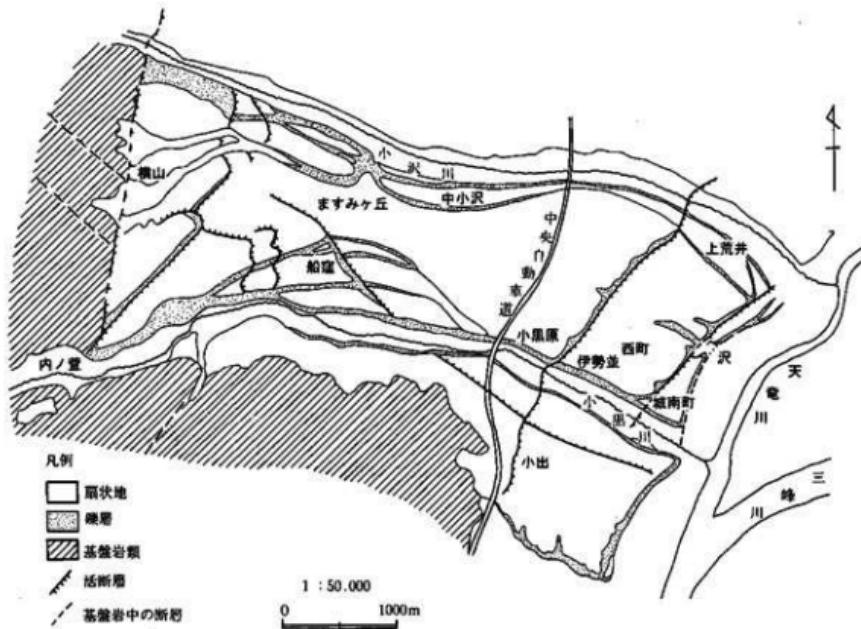


8 写7の角礫層上部の砂粒(画面の横の長さは6mm)
姶良Tn火山灰と思われる火山ガラスが混じっている。

第3節 地形及び地質

1. 小黒川扇状地について

伊那市の西町・伊勢並・小黒南原の地域は、小黒川扇状地の上に位置している。小黒川扇状地とは、小黒川と小沢川にはさまれた部分に主要部が広がっており、一部西春近の小出地区が含まれる。扇頂部を内ノ萱とし、扇端の西町城南町まで長さ 6 km である。この扇状地は小出地区を除くと、ほぼ四角形という面白い形を示す。扇頂部は内ノ萱から横山まで 2 km、扇端部は小黒から富田町まで 2 km 弱だから、扇状地の面積は 12 km² である。南側に張り出した小出地区は約 1.5 km² ある。このうち、今回の調査対象地域は東側に寄った扇端部南側の地域である。小黒川扇状地は中央アルプスの将棋頭山 (2730m) から流れ出ている小黒川によってつくられたもので、扇状地を構成する疊層中には源流に露出している木曾駒花こう岩壁を含んでいる。扇状地が四角形を示すのは、この扇状地の発達している場所が中央アルプスを胸切りにしている境縄断層など断層の影響によるもので、これについては後項で説明したい。



第3図 小黒川扇状地全体図

2. 小黒川扇状地東部に分布するテフラ

小黒川扇状地は東半部と西半部とで地形の発達状況にちがいがある。ますみヶ丘より上方の西半部は複雑な地形発達を示し、そこに見られるテフラ層も複雑な被覆を示す。これに対し、広域農道より下流側の東半部は比較的単調な地形発達を示し、被覆するテフラ層もあまり大きく変化していない。

今回の調査では、主要な地形面にトレンチを掘ったり、露頭で見られるテフラ層から重鉱物・火山ガラスの分析などを中心に調査を実施した。調査地点や露頭箇所は次のとおりである。

表1 資料採集及び調査地点一覧（場所Noは第9図に示す）

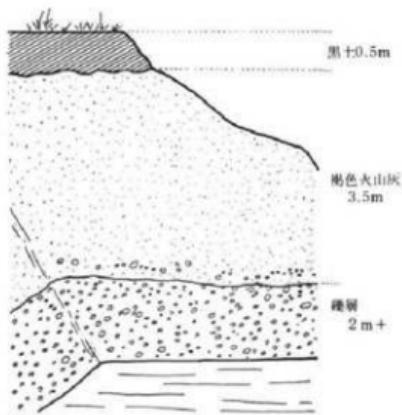
No.	場 所	調 査 地 の 説 明
1	中央道西、小黒川左岸の露頭	小黒原の扇状地面を被覆するテフラ層
2	小黒川断層の露頭	小黒川断層露頭で疊層の上部にくるテフラ層まで断層に切られている
3	小黒川断層の下側、断層露頭より南側でのトレンチによる	小黒川断層より東側の扇状地でトレンチを掘って観察
4	小黒川断層より下側、西町の面上にトレンチを掘る	No.3資料と同じ地形面で、西町の扇状地を代表する位置にあたる。トレンチを掘って観察
5	No.4の50m北側	No.4より北側へ50m、工事によって掘削された露頭
6	城南町の上段で宅地造成地の崖、西町断層露頭	西町の東端部にあたる。西町の扇状地面を被覆する全テフラ層が観察できた
7	城南町北側の崖、砂利採取場の露頭	西町断層の断層崖をつくる小黒川疊層 西町の台地東端部
8	城南町住宅地の道路、水道工事による断面	城南町の段丘の表層堆積物
9	No.8の続きの位置	No.8と同じ面

上記の中でNo.1・3・4・8・9は柱状図と鉱物分析結果（第5～8図）を、No.2は露頭図（第14図）と鉱物分析結果（第15図）を、No.5は簡単なスケッチ（第4図）を、No.6は露頭図（第11図）を、No.7は説明を順次記していく。

調査地域内でもっとも厚くテフラ層が重なっているのはNo.6の城南町西町断層露頭(第11図)である。ここでは6.7~3.2mのテフラ層があり、礫層の直上に三岳スコリア(約5.7万年前)が風成でのっており、このスコリア層を最下位において、新期御嶽上部テフラ層が見られる。西町から小黒原一帯で三岳スコリアまで完全な風成層としてみられるのはNo.6の付近に限られる。西町の扇状地のはば中央部にあたるNo.5では3.5mのテフラがあり、その下に礫層になっているものの三岳スコリアではなく、それより上のテフラ層が現れているにすぎない。



写1 西町の小黒原面中央部の工事現場 (No.5 地点)
礫層の上におよそ3.5mのテフラ層が堆積している



第4図 西町の小黒原中央部の工場現場のテフラ (No.5 地点)

小黒川断層より東側の西町地域の扇状地面をおおうテフラについて、ほぼ中央部でのトレチNo.4と断層崖東側のトレチNo.3での調査を試みた。いずれの場合もトレチが礫層までとどかなかったので三岳スコリアの確認はできなかったが、No.5と同様で三岳スコリアより上側のテフラ層のみをのせていると推定している(第5図・第6図)。

柱状図 cm	特徴	主な鉱物		火山ガラス bw pm	その他
		重鉱物	軽鉱物		
0 cm	耕土 黒色	hy>mg>au (bi)	fl>qz	●	
		hy>mg>au>bi	fl>qz	●	
50 cm	黒色 褐色土が混じる	hy>mg>au>ho	fl>qz	●	
		hy>mg>au	fl>qz	●	
100 cm	褐色火山灰 軟質	hy>mg>au	fl>qz	●	
		hy>mg>au	fl>qz		
150 cm	褐色火山灰 硬質	hy>mg>au (ho)	fl>qz		火山岩片混入
		hy>mg>au (ho)	fl>qz		火山岩片混入
200 cm	褐色火山灰 硬質 ▲▲ ▲▲ ▲▲ ?	hy>mg>au (ho)	fl>qz		火山岩片混入
		hy>mg>au ho	fl>qz		
[鉱物]	黒褐色火山灰 非常に硬質 やや砂質 赤スコリア混入	hy>mg>au>ol>ho	fl>qz		火山岩片多い
		hy>mg>au>ol>ho	fl>qz		火山岩片多い
[火山ガラス]	bw : バブル型火山ガラス pm : 軽石型火山ガラス br : 褐色ガラス ガラスの含有量 ● 10%以上 ○ 1~10% ▲ 1%以下				
[柱状図]	△軽石 ▲スコリア ○砂～泥 ○砂 ▲角礁 ▲黒土 白抜きは火山灰				

第5図 西町の小黒原面中央部のトレチにおけるテフラ柱状図及び鉱物組成(No.4地点)

柱状図	特徴	主な鉱物		火山ガラス		その他
		重鉱物	軽鉱物	bw	pm	
0 cm	耕土 黒色(火山灰)	hy>mg>au>ho	f1>qz	●		br
50 cm	黒色土に黄褐色土が混じる (火山灰)	hy>mg>au>ho	f1>qz	●		br
		hy>mg>au>ho	f1>qz	●		
100 cm	黒褐色土(火山灰)	hy>mg>au>ho	f1>qz	●		
150 cm	黄褐色火山灰 ややソフト 赤スコリア混入	hy>mg>au>ho	f1>qz	●		
		hy>mg>au ho	f1>qz	●		
		hy>mg>au (ho)	f1>qz	●		
		hy>mg>au (ho)	f1>qz	●		火山岩片混入
		hy>mg>au (ho)	f1>qz	●		火山岩片混入
		hy>mg>au (ho)	f1>qz			火山岩片混入
		hy>mg>au (ho)	f1>qz			火山岩片混入
200 cm	?					

[鉱物] ol: かんらん石 au: 普通輝石 hy: しそ輝石 ho: 角閃石 bi: 黒雲母 mu: 白雲母
 zi: ジルコン ga: ざくろ石 mg: 磁鐵鉱 qz: 石英 f1: 長石
 () はごくわずか含まれる
 [火山ガラス] bw: バブル型火山ガラス pm: 軽石型火山ガラス br: 褐色ガラス
 ガラスの含有量 ● 10%以上 ○ 1~10% ▲ 1%以下
 [柱状図] △ 軽石 ▲ スコリア :::: 砂~泥 ○ 織 ■ 角織 = 黒土
 白抜きは火山灰

第6図 西町の小黒原面、小黒川断層東側におけるテフラ柱状図及び鉱物組織(No.3地点)

小黒川断層露頭のNo.2においては礫層の直上に三岳スコリアがあらわれているものの、完全に離水した面上に降下したものではなく、半水成の産状を示し、三岳スコリアの上側に砂や礫が重なってくる。小黒川断層より上側の小黒原にのってくるテフラ層はNo.1に示されている(第7図)。ここでのテフラの層厚は280cmを示すが、三岳スコリアはあらわれていない。三岳スコリアより上位のスコリアがやや密集するように散在してあらわれている。

段と下段とに分割されたわけである。

小黒川扇状地上のテフラの厚さは扇端部の東側が一番厚くて、6.3mに達する地点もある(No.6)。それより上側に向かって順次薄くなり、西町地域中央部で3.5m(No.5)、中央道の上付近で2.8m(No.1)となっている。

柱状図 cm	特徴	主な鉱物		火山ガラス bw pm	その他
		重鉱物	軽鉱物		
0	黒色	bi>mg>hy>au>ho 結晶は少ない	fl>qz	●	風化岩片多い
50	灰褐色砂 御嶽新期火山灰、姶良Tn火山灰 が混じる	bi>mg>hy>au>ho 結晶は少ない	fl>qz	●	風化岩片多い
	bi>mg>hy>au>ho 結晶は少ない	fl>qz	●	風化岩片多い	
	亜角礫 5~10cm 砂岩、粘板岩				

柱状図 cm	特徴	主な鉱物		火山ガラス bw pm	その他
		重鉱物	軽鉱物		
0	黒色	hy>mg>au (ho, bi)	fl>qz	●	風化岩片多い
50	灰褐色砂 御嶽新期火山灰、姶良Tn火山灰 が混じる	hy>mg>au (ho, bi)	fl>qz	●	風化岩片多い
	hy>mg>au>bi (ho)	fl>qz	●	風化岩片多い	
	亜角礫 5~15cm 砂岩、粘板岩				

[鉱物] ol: かんらん石 au: 普通輝石 hy: しそ輝石 ho: 角閃石 bi: 黒雲母 mu: 白雲母 zi: ジルコン ga: ざくろ石 mg: 磁鐵鉄 qz: 石英 fl: 長石
()はごくわずか含まれる
[火山ガラス] bw: バブル型火山ガラス pm: 穀石型火山ガラス br: 極色ガラス
ガラスの含有量 ● 10%以上 ○ 1~10% · 1%以下
[柱状図] △ 軽石 ▲ スコリア ◯ 砂~泥 ○ 硫 ■ 角礫 = 黒土
白抜きは火山灰

第8図 城南町、下水道工事の溝における柱状図及び鉱物組成(上No.9地点、下No.8地点)

城南町の住宅街にあたる低位段丘面の上にはいわゆる“赤土”と呼ばれる火山灰層は見られない。20cm程度の薄い黒色土が面上を被覆しており、その下は40cm程度の灰褐色砂層となる(第8図)。この砂層中に火山灰起源の堆積物が含まれている。新期御嶽火山灰は上側の扇状地より流れ出てきた重鉱物が砂中に混入したものであろう。注目されるのはNo.9地点において、50cm以下の砂層中より広域テフラの姶良Tn火山灰が密集して産出することである。姶良Tn火山灰は、鹿児島の桜島火山が現在は中央火口丘として活動しているところの姶良カルデラの形成とともに噴出した火山灰で、その年代は約2万5千年前とされる。城南町で見られるように、2万5千年前ころは御嶽火山が静穏期に入っている、御嶽起源のテフラは見られなくなり、扇状地や段丘面を覆う風成堆積物は褐色土や黒色土となり、そこに広域テフラがはさまれている。



第9図 小黒川扇状地東部の西町地区の地形面

3 小黒川扇状地東部の地形面

小黒川扇状地東半部の地形面は概観して3段の面に分割できる。上位面が小黒原地域、中間が西町地域、その下側に天竜川に面した河成段丘状の地形を示す城南町地域がある。

小黒原地域というのは勤労者福祉センターなどの施設が集中する平らより一段上の部分で、中央自動車道や広域農道が通過している。この平らはほとんどが畑地帯で、中央自動車道より東側に住宅がわずかに点在する。標高は720mから750mにわたる。小黒川扇状地面のほぼ中央部にあたり、もっともよく扇状地の原型が残っている部分で、天竜川に向かって東へゆるく傾斜しており、東西方向に軸をもつ半波長400mくらいのゆるやかなうねりが見られる。

小黒原地域と西町地域を分けているのが小黒川断層によって生じた断層崖（捻曲崖）である。この地形や断層については次項で説明する。

西町地域は小黒川断層より東側の部分で、北側には勤労者福祉センターなどの文化施設や学校があり、南側の大部分は畑地帯となっている。今回の主調査地域がこの畑地帯である。本地



第10図 小黒川扇状地の小黒原面と小黒川断層との関係

域は小黒川扇状地の東端部にあたり、扇状地の扇端部でもある。

標高は680mから710m、小黒原地域と同様に天竜川に向かってゆるく傾斜すると同時に、ゆるいねり地形が明瞭にあらわれている。これは、扇端部のため扇状地を侵食した崖地がはっきりとあらわれ、中には東へ流れる谷が掘り込まれている。県伊那文化会館南側の谷は特に顕著で、扇状地を北側と南側とに二分する深い掘り込みができる。

小黒原地域と西町地域とはもともとひと続きの扇状地面であった。小黒川断層の動きがおこり扇状地面は二分され、断層より西侧の上段地域と断層より東側の下段地域とに分かれたのである。小黒川断層は西上り東落ちの変位を示す活断層で、小黒原地域と西町地域とは同じテフラで覆われている。

第9図に小黒川扇状地東部における地形面区分を示した。この区分は扇状地面のできた順に区分してあり、地形面の標高や連続で区分したものでない。すでに記述したとおり、小黒原地域と西町地域とは同じ年代のテフラ層を被覆させているところから、両者を小黒原面と一括している。もともとひと続きだった小黒原面が小黒川断層の発生により、上段の小黒原地域と下段の西町地域とに分かれたのである。

西町面は西町地域の東端部の一部で、この部分のテフラには風成の三岳スコリアが存在する。ということは、西町面の部分が小黒川扇状地の中で一番早くにできた部分である。西町面を囲んでいる小黒原面とは地形的な段差が見られない。一般に扇状地の新旧の地形面が重なり合う時、両者の間に侵食崖にあたる崖が存在しない事も多い。それが、扇状地地形の特徴でもある。

城南町地域は西町の扇状地面より一段低い地形面で、天竜川による河成段丘面の形態を示す。現在は新しい住宅地が全面に広がり、元の地形面は観察しにくい状態になっている。次項の西町断層でも説明するが、この段丘地形は断層運動も関係して形成された段丘地形である。第9図では城南町面としてある。

城南町の段丘面は天竜川の氾濫面より20~24mの比高をもつ段丘崖の上にある。面の標高は660mから670mである。西町地域の扇状地面とは比高12~16mの段丘崖状の崖で境されている。この崖では断層が確認されていて、西町地域の小黒川扇状地側の上昇にともない扇端部が持ち上がり、その下側に城南町の段丘地形ができた。しかし、段丘上の一部には天竜川の旧河床跡も見られ、河成段丘としての形態もそなえている。

4 西町断層

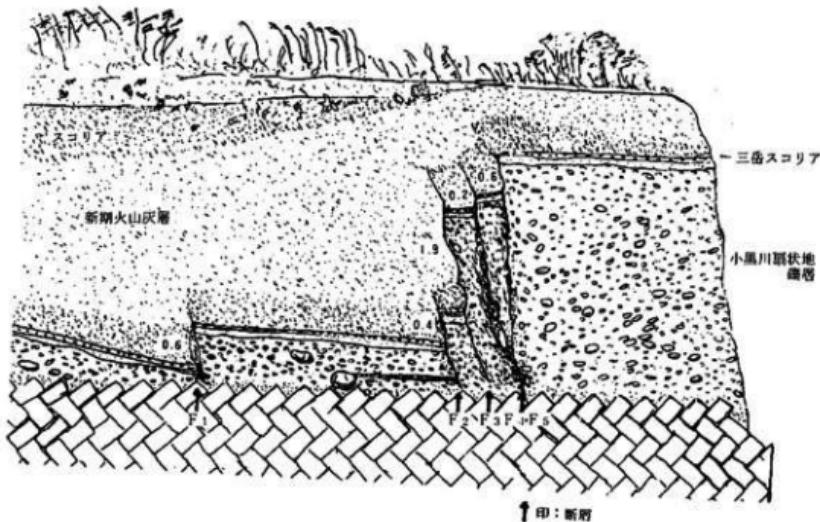
前項でも述べたように、城南町の段丘地形が単なる天竜川による侵食地形でなく、断層変位による段丘地形ではないかと疑問をいただきながら経過してきた。たまたま、1985年城南町西側の段丘崖682.2mの標高を示す崖頂部を削り込んで宅地造成工事が行われていた（No.6地点）。そこに、礫層からテフラ層まで切る断層があらわれており、この断層が段丘崖のもり上がりに伴って生じた断層であることが判明した。

伊那谷では扇状地が断層崖によって段差を生じたとき、断層で上がった側の扇状地の先端部に盛り上がりができる事例が多い。こうした現象は国内内外を問わず報告されている。西町断層の場合も盛り上がり地形ができており、盛り上がり地形の頂部が682.2m地点であり、盛り上がりの裏側にできた逆断層が宅地造成地に出現した断層露頭（写2・第11図）である。



写2 城南町西町断層の露頭

断層は3ヶ所に見られ、中でも中央部の断層が最も大きな変位量を示している。ここでは5本の高角逆断層が集中しており、小黒川扇状地礫層とその上を覆う三岳スコリアをはじめとするテフラ層を切っている。断層の変位量はF1=0.6m, F2=0.4m, F3=1.9m, F4=0.2m, F5=0.6m、合計3.7mである。礫層の直上に厚さ10cm弱の三岳スコリアが成層していて、このスコリアの変位によって断層変位量が明確に測定できた。



第11図 城南町西町断層の露頭スケッチ（写2と同じ場所）

断層を覆うテフラ層は新期御嶽上部テフラ層である。上盤側では三岳スコリアの上に1.2mのテフラがのっている。下盤側は断層で落ち込んだ凹地を埋積するように4.5m以上の厚いテフラに移化している。その最上部の部分にスコリアの散在する帶があり、この帶は断層によって切られていず、断層によって生じた傾斜地をならすように埋めている。つまり、西側に厚くなっている。これらの観察から、西町断層の活動は三岳スコリア以降、千本松スコリア以前となる。三岳スコリアの年代が5.7万年前、千本松スコリアは5万年前と推定できる。この露頭では7千年に3.7mの変位量を示すわけで、1000年あたりで約0.5mの変位速度をもっていたといえる。この変位速度は、活断層としてB級規模のものである。

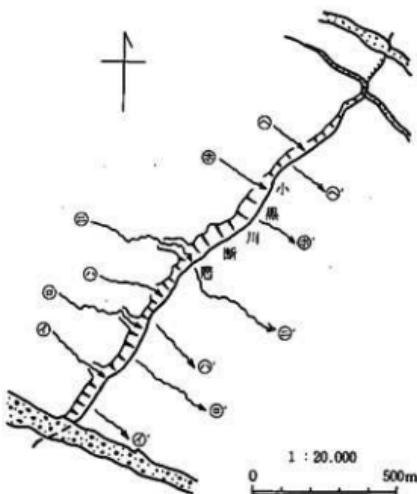
5 小黒川断層

西町地域と小黒原地域とを分けているのが小黒川断層で、断層によって生じた低断層崖があつたかも段丘崖のように明瞭な崖をつくって小黒川崩壊地を二段に分けている。二十数年前までは崩壊地を断層が切断して断層崖があらわれているなど誰もが信じていなかった。1966年に断層によって崩壊地が切られていることを発表したとき多くの専門家に反対された。しかし、小黒川断層は伊那谷における活断層発見時代に断層地形の模式的なものとして注目された断層である。

小黒川断層の断層崖が天竜川の侵食によってできた崖ではないとわかった最初のきっかけは扇状地面を流れている谷地形の存在であった。崖の上側にも、崖の下側にも浅い谷地形が存在した。もし、天竜川による河成段丘だったならば、崖の下側の谷地形は崖と平行する南北方向にできているはずだ。けれど、実際は木曽山脈側から天竜川に向かう東西方向に走り、崖の方向とは直交しているのである。

扇状地の上に残されている浅い谷地形は断層崖の上と下とで一直線につながっていない。この事実は断層が水平方向にも動いていることを示す証拠である。そこで、崖の上側の谷が崖の下側に移ったとき、どこへつながっているか調べてみた。このような現象を河谷のオフセットという。

河谷のオフセットが一番はっきりと最初に追跡できたのが第12図のⒶ-Ⓐ'である。この谷は勤労者福祉センターの南側の道路を行き、断層崖にぶつかって道が坂になるところに西町教会という建物がある。その教会の西側が小高い雑木林になっていて、雑木林へ登つて行ける。林の北側に深さ4~6mの谷が掘れている。この谷が雑木林からなる断層崖の下に出ると西町教会の北東側をかすめて道路を横切り、県伊那文化会館南側の大きな谷につながっていく。ⒶがⒶ'につながることから、谷は断層崖の下で南へずれてつながることが判別でき、これと合わせて他の谷の位置をつなげてみると、Ⓐの谷からⒶ'の谷までが系統的に同じパターンでずれていることが判明した。そこで、それぞれの谷の移動量を測定した。移動量を水平変位量という。



第12図 小黒川断層による河谷のオフセット

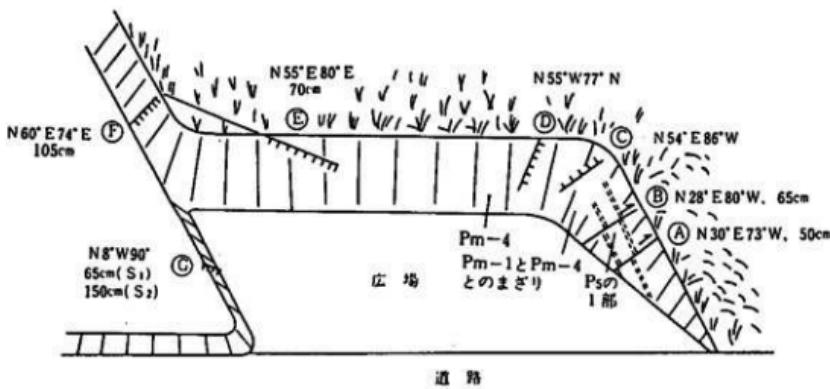
表2 小黒川断層による河谷の水平変位量

谷の名称	Ⓐ-Ⓐ'	Ⓑ-Ⓑ'	Ⓒ-Ⓒ'	Ⓓ-Ⓓ'	Ⓔ-Ⓔ'	Ⓕ-Ⓕ'	平均
移動量(m)	110	100	100	90	90	70	92

谷のオフセットから求められた平均変位量は92mとなった。これは、小黒川断層の水平方向の移動量にあたる。断層崖に向かって反対側の谷が右側に92mずつ動いていることになるので、

この場合、右横ずれ断層と呼ぶ。なお、南側の谷ほど移動量が大きくなっていく一般傾向が認められる。この理由は、小黒川扇状地の離水が南ほど早かったものと推定している。

小黒川断層が一躍全国的に有名になり、活断層の研究者たちが国内や国外からも見学にくるようになった。それは、西町教会の南方150m地点で断層崖を広く掘り込んだ宅地造成がされ、崖の断面が完全に露出したからである。たまたま伊那谷を調査中だった羽田野誠一氏（建設省国土地理院）の目にとまり、同氏による測量調査が実施された。調査の結果は1976年に現地見学会を開いたとき参加者に紹介された。



④～G断層図、走向傾斜と変位量(cm)を示す。接曲・断層による全体の垂直変位量は 東落ち13m +／約2万年(S₂以降)、平均変位速度0.65m／千年

第13図 小黒川断層西町露頭見取り図（羽田野原図1976）

1976年当時の露頭見取り図（第13図）のようにここでの断層はA～Gまで識別された。このうち、E-Fはひと続きの断層であるから6本の断層が確認された。但し、後の調査でも紹介するように、明瞭に礫層を切っている代表的な断層だけが6本ということで、これらの断層に伴うような小断層が何本も随伴している。

羽田野氏の調査による西町露頭における地形面の垂直変位量は西上がり東落ちの13mである。小黒川扇状地において小黒川断層の垂直変位量を測ると次表のようになる。

表3 小黒川扇状地における小黒川断層の垂直変位量

測定地点 地形面の	谷①付近	②付近	③付近	④付近	⑤付近	⑥付近	平均
垂直変位量(m)	13	13	13	12	14	11	13

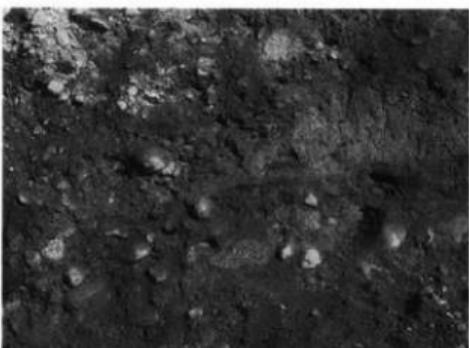
小黒川断層の断層面は疊層の上を被覆しているテフラ層を切っている。すべてのテフラ層を切っているかやや不鮮明であるが、周辺の地形的状況を考慮すると最上部テフラ層までを切るものであろう。すなわち、小黒川扇状地の北端では、小黒川扇状地が小沢川の侵食によってできた扇状地開析面の上荒井面を変位させているからである。テフラの最上部までを切っているので小黒川断層の変位基準年代は3万～2.7万年となる。この間の垂直変位量が13mであるから千年あたりの平均変位速度は、0.43m／千年～0.48m／千年となる。

これに対し、水平変位量は前記のように92mであるから、水平変位の平均変位速度は3.1m／千年～3.4m／千年となる。このことから、小黒川断層の動きは水平ずれが1：7で卓越している。水平の変位速度を基準にすれば小黒川断層の活動度はA級となる。

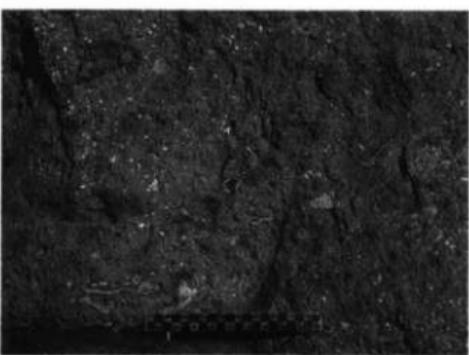
今回（1992年1月）の調査により第13図のF断層が見られる南側の壁面を高さ8m、幅12mにわたってクリーニングをおこないF断層を中心に観察をした。第14図に示すように、F断層と同系統の明瞭に識別できる断層が4本確認され、さらにそれぞれの断層に付随した不明瞭な小断層も認められた。



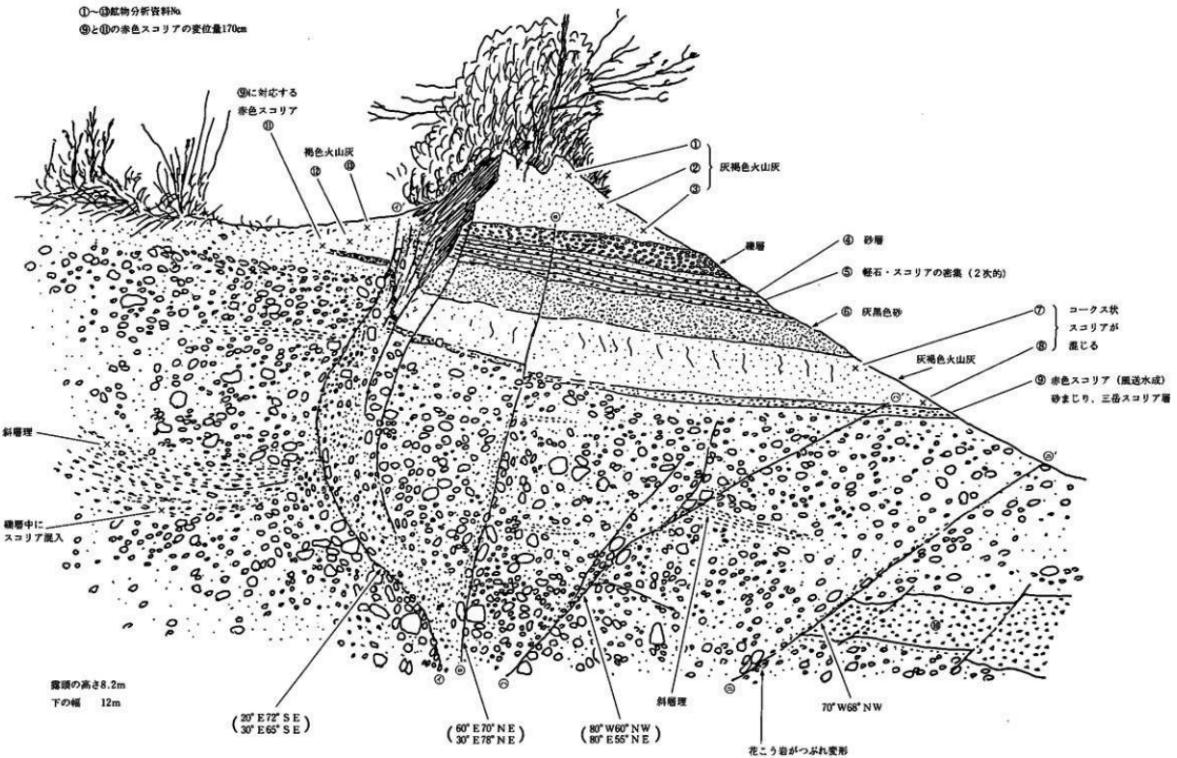
写3 ④断層最上部の疊のひきずり

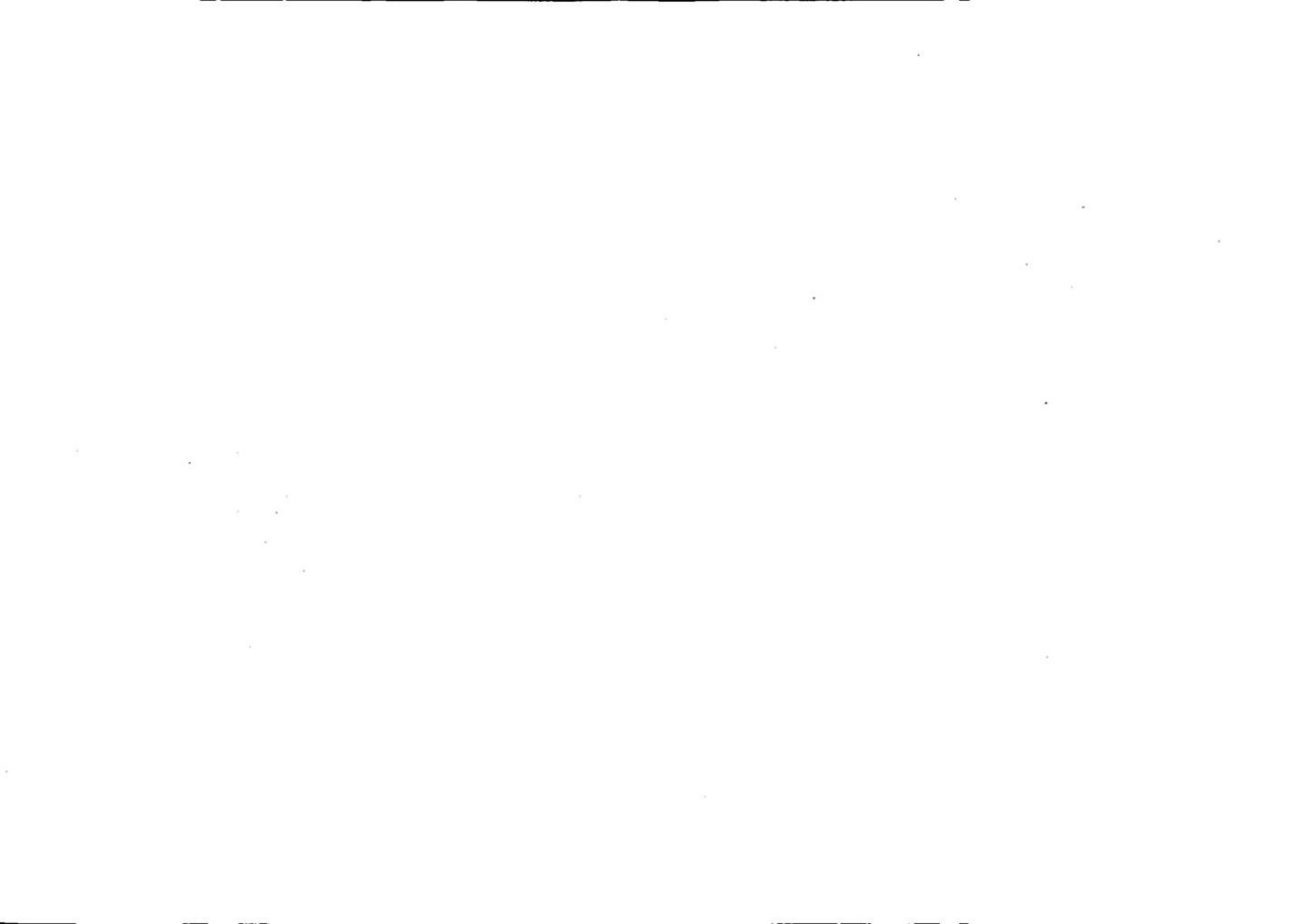


写4 テフラブロックを切る④断層
左下の花こう岩が断層で変形している



写5 写4のテフラブロック近写





採集地點	主な鉱物		火山ガラス		その他の
	重鉱物	軽鉱物	bw	pm	
①	hy>mg>au	fl	·		
②	hy>mg>au>ho	fl>qz			
③	hy>mg>au>ho	fl>qz			コーカス状スコリア
④	mg>hy>au(少ない)	fl>qz			風化岩片>鉱物 コーカス状スコリア多い
⑤	mg>hy>au	fl	·	·	風化岩片=鉱物
⑥	(mg>bi)	qz>fl			風化岩片>鉱物
⑦	hy>mg>au>bi	fl>qz			コーカス状スコリア多い
⑧	hy>mg>au>bi	fl>qz			コーカス状スコリア混じる
⑨	hy>mg>bi>au	fl>qz			風化岩片混じる
⑩	hy>mg>au>bi>ho	fl>qz			鉱物>風化岩片、コーカス状スコリア
⑪	hy>mg>au	fl>qz			風化岩片混じる
⑫	hy>mg>au	fl>qz			鉱物>風化岩片
⑬	hy>mg>au(bi,ho)	fl>qz	·		風化岩片多い

凡例

(鉱物) ol:かんらん石 au:普通輝石 hy:しそ輝石 ho:角閃石 bi:黒雲母 mu:白雲母 zi:ジルコン ga:ざくろ石 mg:磁鐵鉱 qz:石英 fl:長石

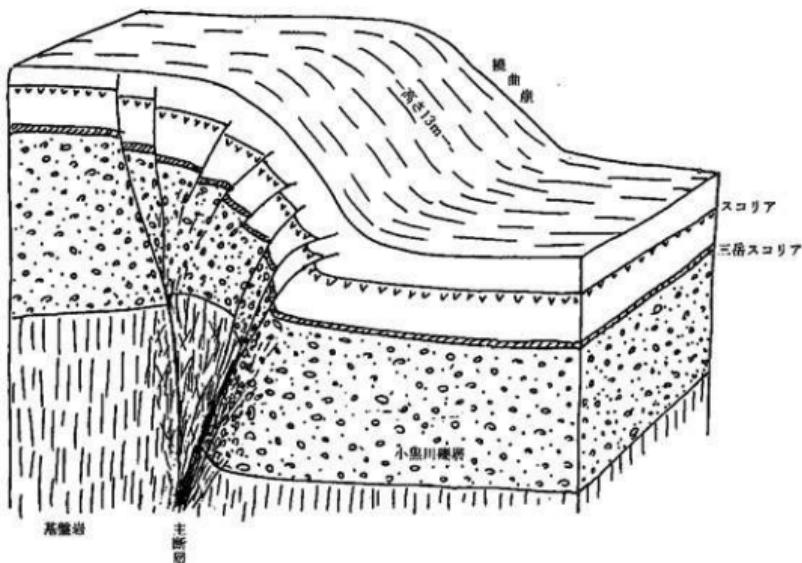
()はごくわずか含まれるもの

[火山ガラス] bw:バルブ型火山ガラス pm:軸石型火山ガラス br:褐色ガラス
ガラスの含有量 ●10%以上 ●1~10% · 1%以下

第15図 小黒川断層西町露頭の南側壁面における①~⑬の鉱物分析結果

露頭スケッチで示すように礫層などを切る目立つ断層を④-④'、⑤-⑤'、⑥-⑥'、⑦-⑦'とする。④-④'が第13図のF-E断層にあたる。他の小断層は今回のクリーニングの結果見えるようになった。④断層がこの焼曲崖をつくる断層系の中で一番西側にあたり、西上がり東落ちの垂直変位がはっきりする断層である。1976年当時には、この断層が地表面まで見事に見えていた。地表近くのテフラ層・砂礫層がけずり取られたため、今は見えなくなっている。1976年の調査で得られた変位量は105cmである。今回④断層の両側に見られる赤色スコリア（三岳スコリア）の変位量を第14図の⑨-⑩の標高から測ると170cmとなる。このように、西町露頭における各断層ごとの垂直変位量はG=150cm、B=65cm、A=50cm、のようにそれほど大きな値を示していない。崖全体の示す垂直変位量が13mであっても、個々の小断層の変位量の総和は13mよりはるかに小さい。これは、焼曲崖の特徴であって断層A・Bで見られるように焼曲崖をつくる急斜面では斜面と同じ勾配で地層が傾斜（傾動）しているためである。

小黒川断層の北方延長にあたる南箕輪村神子柴の露頭においては、垂直変位量40mの断層崖をつくっており、上から30mまで礫層であるが下部10mは基盤岩のホルンフェルスが露出している。基盤岩が断層変位をおこし、そこを覆っている礫層が基盤のずれにひきずられて急傾斜することにより焼曲崖のできることが復元できる。小黒川断層の露頭は焼曲崖における小断層系や礫層の傾動を典型的に示したものである。



第16図 小黒川断層による焼曲崖の復元図

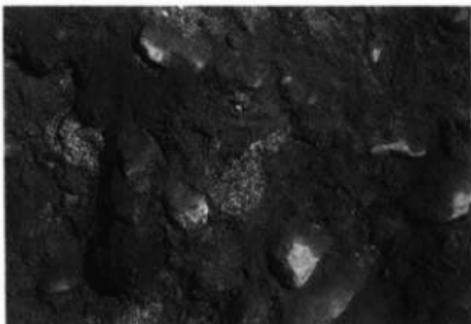
6 小黒川崩状地をつくっている礫層

小黒川崩状地をつくっている礫層を小黒川礫層と呼ぶ。小黒川礫層の第一の特徴は礫中に木曾駒花こう岩礫が混入することである。木曾駒花こう岩は小黒川の上流域にあたる将基頭山一帯に分布している。内ノ萱登山コースでは五合目の大樽小屋より上方から花こう岩となる。黒色包有物を含む等粒状中粒花こう岩緑岩の木曾駒花特有の岩相をもつ花こう岩であるため、礫層に入っている花こう岩礫は少ないけれど小黒川礫層であるとの目安となる。すぐ北側を流れる小沢川の礫層中には木曾駒花こう岩礫を含んでこないため、花こう岩の有無により両礫層を区分することが容易である。

小黒川断層西町露頭では礫層の最上部から6mまでを観察することができる。わずかに混入する木曾駒花こう岩礫を除き、全体の礫

が木曾山脈から流れ出てきたホルンフェルスである。このため、礫層の色が黒ずんで見える。亜角礫から亜円礫を主体にし、掏汰が不良で、大小不揃いのまま雑然と堆積している。部分的に細粒の礫と粗粒の砂が集まっている部分がある。その細粒相は横への連続が悪く、レンズ状にはされているにすぎない。また、細粒の堆積物の入っている様子で層理面が推定できるが、礫だけの部分では層理面さえ判断しにくい。礫径の大きなものは30cmで、大部分は10~15cmである。固結度は大変悪く、基質の部分は礫質である。

露頭の東側に軽石粒からなるテフラの団塊がはさまれている。端は断層で切られているが、ますみヶ丘周辺でみられるソリフラクション堆積物がくずれ、礫と共に流れてきたものと思われる。ますみヶ丘方面では伊那軽石層より上位になるとソリフラクション堆積物になることから、新期御嶽上部テフラ層の最上部（6万年前前後）と同時代の礫層と推定される。礫層の最



写6 小黒川断層西町露頭でみられる小黒川礫層
木曾駒花こう岩を含む



写7 第9図⑦地点の小黒川礫層

上部に三岳スコリアがのってくることから、5.7万年前ころには礫層の堆積がほぼ完了している。ただし、三岳スコリア層より3mほど上まで砂や細礫の堆積がくり返している。けれどこの部分は満水時のときに水つきになるような環境であって、平常時には離水していたものと推定される。

春日城跡南側の谷の南側部分の城南町に面した西町断層崖で、崖の崩壊部を掘りくずしている。この砂利採取場（第9図のNo.7地点）において小黒川礫層が高さ20mにわたって観察できる。最下部の礫層中にテフラがはさまれているが薄層のためどこのものか対比できない。ここ の礫は断層露頭の崖よりやや小さい礫が多く、円礫が多くなっている。部分的に砂majiri細礫層がはさまれているものの不連続的で、テフラ起源の堆積物は見出だされない。

7 伊那市西町で見られる小黒川扇状地の発達史

(1) 小黒川扇状地の形成

小黒川扇状地は伊那谷の扇状地の中では新しい時期の扇状地に属する。伊那市周辺の扇状地と比較すると、三峰川の六道原扇状地がすっかりできあがったあとでできた扇状地である。扇状地の形成期を直接比較できるものに御嶽第I軽石層がある。この軽石層が噴出したのは7～9万年前で、六道原扇状地の上には御嶽第I軽石層を一面にのせていることから、8万年前には六道原面はすっかりできあがっていたことになる。実際は10万年前より古く完成していた。ところが、小黒川扇状地の方はその多くが8万年前より後でつくられたのである。

小黒川扇状地をつくっている礫層を小黒川礫層という。この礫層中に御嶽第I軽石層が入ってくる。西町の小黒川断層の露頭の中で、礫層中に御嶽第I軽石層を混入した礫状のブロックが入っている。これは、小黒川扇状地の上流部にいたん堆積していた御嶽第I軽石層が侵食され、流れ下ってきて再堆積したブロックである。だから、8万年前ころは小黒川扇状地がさかんに成長を続けており、このことの裏付けとして小黒川礫層中に御嶽第I軽石層がはさまってくる。

小黒川扇状地は5万～6万年前ころまで盛んに礫層の堆積が続いていた。これは、ますみヶ丘方面の小黒川礫層中に新期御嶽下部テフラ層の軽石が頻繁にはさまることで判明する。

(2) 西町断層の動きと扇端部の離水

小黒川扇状地は扇端部にあたる西町付近から離水がはじまった。離水した部分は上流からの礫層の運搬がなくなり、水成堆積物が重なるような環境から風成堆積物が重なるような環境へと転換した。洪水時においても水つきになることがなく、恒常に空からの降下堆積物のみが

重なるような土地になったのである。周囲から水がついてこない台地上の地形になることが離水である。

城南町に面する西町台地の先端部では三岳スコリアの風成層が小黒川礫層の直上をおおっている。三岳スコリアの降下は5.7万年前ころと推定されているが、そのころ小黒川扇状地の扇端部が離水して台地と化した。この動きは西町断層の動きによる。西町断層は西上がり東落ちの動きを示す。西町側の土地が上がることによって離水が促進され、城南町側の土地が下がることによって天竜川の側方侵食が城南町側までおよんでいた。

一般に伊那谷では竜西側の扇状地が断層によって持ち上がり、段丘状の地形となって天竜川と並走している。西町断層はこの手の断層に属するもので、春日城跡公園をはじめとする西町の段丘状台地は断層による軽微な変位丘陵といえる。

(3) 小黒川断層によって扇状地面が二段に分かれる

小黒川扇状地は5.7万年前ころより、扇端部にできた西町断層の動きを反映して下流側より離水がはじまり、順次上流側に離水域を広げていった。離水域は中央自動車道から広域農道の通る付近まで進んでいった。このため、これより上流側は小黒川や小沢川による側方侵食によつて扇状地侵食段丘が広がっている。つまり、小黒川側から入り込んだ侵食面が船窪であり、小沢川側からの侵食面が中小沢の上段面である。両侵食面にはされた部分は伊那西小のあるますみヶ丘の部分で、この部分の小黒川扇状地面はくびれるように著しくせばまっている。扇状地の下流域が断層をともなって隆起に転じ、その影響を受けて中流域に侵食面が広がったのである。西町断層の活動期と船窪面の形成期とが一致するのは両者をカバーするテフラが一致していることによる。そのテフラは上部テフラ層の最上部にくるソフトロームである。

小黒川断層は西町断層から分岐派生した断層である。分岐点は南箕輪村神子柴で、神子柴の711.1三角点の丘陵から分岐し、北東—南西方向にのびて小黒川扇状地に達している。神子柴から御園の堀ヶ丘、山寺の高尾町、小沢の川北を通過して上荒井に達し、小黒川扇状地を横断して小黒川に達し、小出一区地区の山麓付近にぬけていく。この間の延長距離は6km(第17図)である。

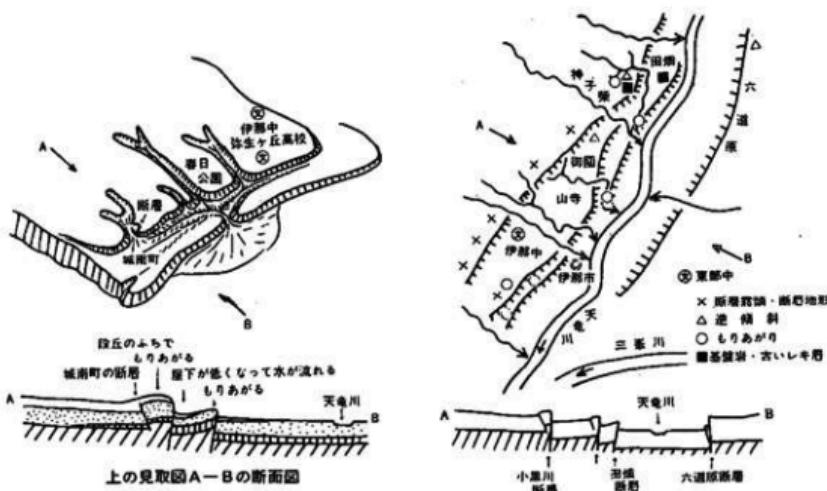
小黒川断層は小黒川扇状地の東部を上段と下段とに二分している。二分する時期は御嶽火山のテフラ降下期の最末期にあたり、約3万年前後と推定される。そして、この断層運動は完新世まで続いており、今後も動く可能性をもった活断層である。

(4) 城南町の段丘状地形ができる

伊那市の市街地や国道は天竜川と同じ高さの位置にあり、現氾濫面にあたる。この市街地に対し、城南町の段丘面は沢地区の旧国道より一段と高い位置にあり、ごく普通の段丘面のよう見える。ところが、この地形は断層によってできた段丘状の地形ではないかという疑いが濃い地形である。城南町は西町断層と並行してできたもう一本の断層で土地が持ち上がってできたのではないかと推定できるわけで、もう一本の断層とは旧国道に沿ってできている崖が、断層崖かも知ないのである。

沢の崖地形が純粹に天竜川の侵食崖でなく、断層で持ち上がった部分に天竜川の侵食が働いたのではないかと推定している。この理由について説明しよう。

城南町の面上では、西町断層崖の崖下より疊地となって川が流れている。城南町の段丘面上の水が山側の崖下に流れ込み、それらの水が崖下の低地を流れて春日城跡下の一ヶ所に集まり、そこからひとつの流れになって沢地区の天竜川氾濫面にぬけている。この水系のでき方は、城南町面をかぎる東端の崖が断層による持ち上がりがあったことを反映している可能性がある。



第17図 断層がつくった段丘地形

第4節 歴史的環境

伊那市西町地区は多くの主要な遺跡の密集している地帯である。特に小黒南原・伊勢並遺跡は八人塚・狐塚の古墳群があるところでもあり、旧石器の遺跡としても注目しなければならない地帯である。小黒南原・伊勢並の両遺跡を中心とした周辺の遺跡を概観してみると縄文時代では次のようにある。

まずみが丘遺跡は、縄文時代中期。

赤坂遺跡では、縄文時代前期木島式土器が出土しており、その他縄文時代中期の遺物も出土している。

上の山遺跡からは縄文時代中期中葉の土器が発見されており、平安時代の土師器・須恵器・灰釉陶器などが出土している。

伊勢並遺跡からは、先土器が発見されており、縄文時代早期の格子目の押型文土器や斜縄文土器、縄文時代早期末の土器、縄文時代前期初頭の木島式土器、縄文時代中期後葉の住居址一軒も発見されている。

山の神遺跡からは縄文時代早期の土器、縄文時代中期後葉の遺物と土壙などと、弥生時代の土器、平安時代の遺物など中世の天目茶碗も出土した複合遺跡である。

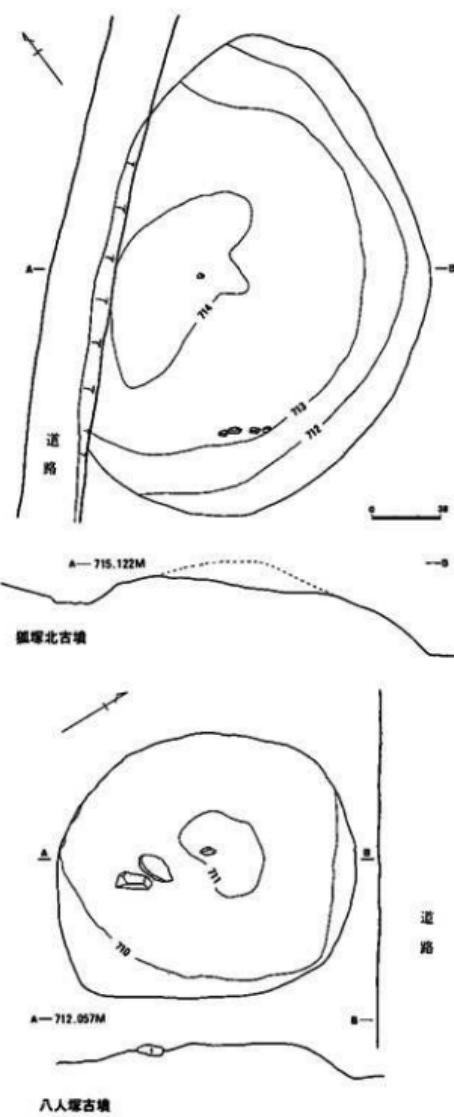
小黒南原遺跡からは表面採集によるものであるが、縄文時代中期初頭型式の遺物や縄文時代中期後葉の遺物が発見されている。

今回調査が行われた地域より北方にある伊那市総合運動場の西隣には富士塚がある。この富士塚は江戸時代中期頃のものといわれており、富士信仰の裏付け資料となっている。

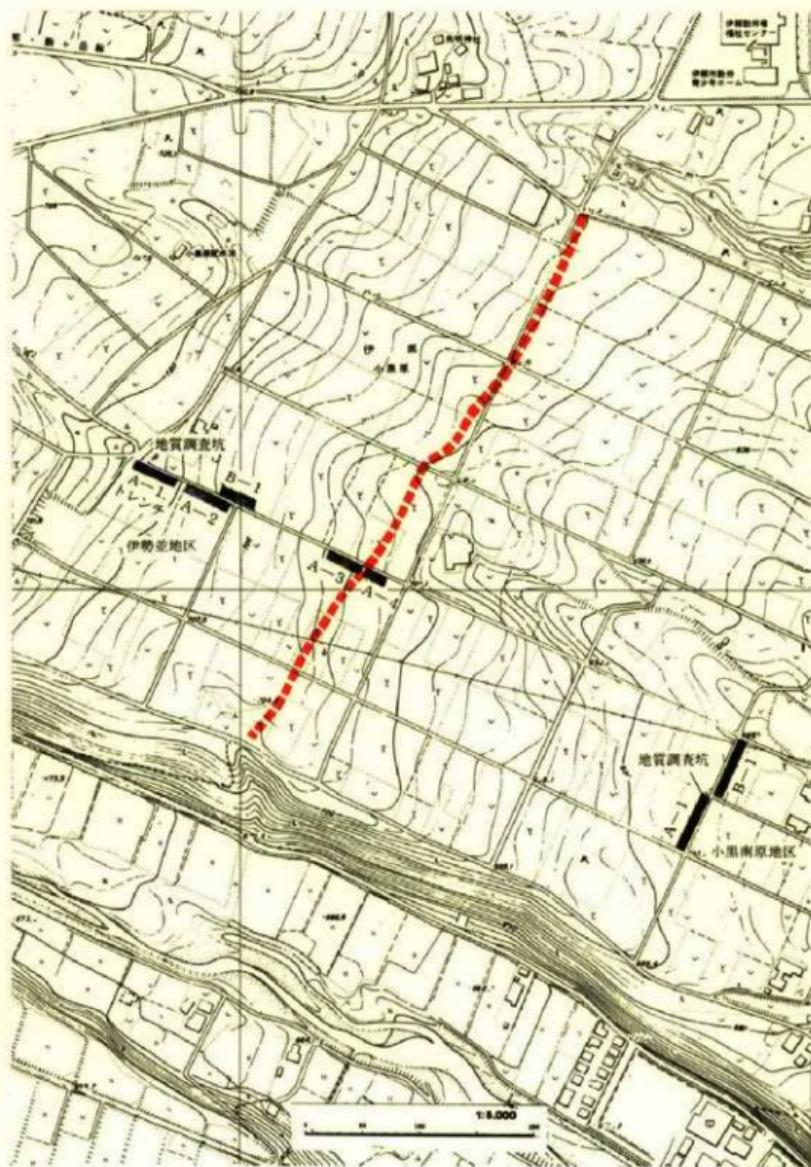
古墳関係では狐塚北古墳・狐塚南古墳・八人塚古墳など6世紀代の群集古墳が分布している。狐塚南古墳は、昭和50年に土取り工事のため発掘調査された。規模は径14m高さ2.1mで横穴式石室の6世紀代後半の古墳である。現在は一部に土盛りをしてある。狐塚北古墳は横穴式石室の古墳で狐塚南古墳と同じ6世紀代後半頃の古墳である。八人塚古墳は小黒川の左岸段丘上に所在する古墳であるが、伊那市史歴史編のなかでは2基の八人塚古墳が掲載されておりひとつについては消滅古墳とされている。今回調査した古墳は盗掘に会い石室に使用された石が露出しており保存状態はよくない。この2基の八人塚古墳については今後研究調査していくたいと考えている。

延喜の東山道がこの小黒南原・伊勢並遺跡地域の中の春日街道筋を通っていたのではないかという説があり、今回の調査において一部通過地点と思われる箇所を調査してみた。結果はトレンチ断面において踏み固められたと思われる箇所は認められたが、関係する遺物の出土があるまでには至らなかった。

今回の調査地区周辺には、上記のように先土器時代から中世・近世時代までの広い年代にわたる遺跡が存在しており、今後の調査研究に期待がかかる地域である。



第18図 狐塚北古墳・八人塚古墳実測図



第19図 調査範囲位置 赤点線は旧因による春日街道

第Ⅲ章 調査

第1節 調査の概要

今回の発掘調査は、小黒南原遺跡と伊勢並遺跡を対象として行なわれ、調査地区は小黒南原遺跡区域を小黒南原地区（略号OGM）とし、伊勢並遺跡区域を伊勢並地区（略号ISE）とした。

両遺跡とも畑地帯に広がる遺跡であり、小黒南原地区については遺跡の西端部分、伊勢並地区については遺跡の北端部分にあたる。

畑地帯総合土地改良事業の事業内容は、道路の拡幅及び畑地灌漑用パイプの埋設であり、調査は現況道路に沿って、幅2mのトレンチを設定し実施した。

耕土は耕作によりかく乱されていることから、重機により耕土の除土を行った。表土よりテフラ層までは30~50cm余程度であるが、近年の耕作機械の大型化により覆土のかく乱がテフラ層まで及んでいる箇所もあった。

調査の結果、両地区において検出された遺構はなかった。

伊勢並地区においては、表面採集による遺物の確認がみられ、地元の方への聞き取り調査によつても遺物の分布が存在することは明らかであったが、今回調査された地区についてはこれという遺物の出土もなく、遺跡としては、北端部分周辺地域にあたると思われる。

第2節 遺構と遺物

小黒南原地区（OGM）

小黒南原地区は今回の調査地域の中でも南端部にあたり、畑地帯と住宅地帯との境界部分となる位置にあたる。

トレンチの設定時における地表のレベル差は250cm余りにもなり、現況路面と畑地面とのレベル差が50~150cmにおよぶ箇所もあって、トレンチはA-1トレンチ・B-1トレンチを設定するにとどまった。A-1トレンチに地質調査坑（第9図No.4地点）を設定した。

小黒南原遺跡は、縄文中期初頭から後葉の土器、石櫛・打製石斧などが認められる遺跡とされているが、今回の調査においては遺構の検出及び遺物の出土はなかった。

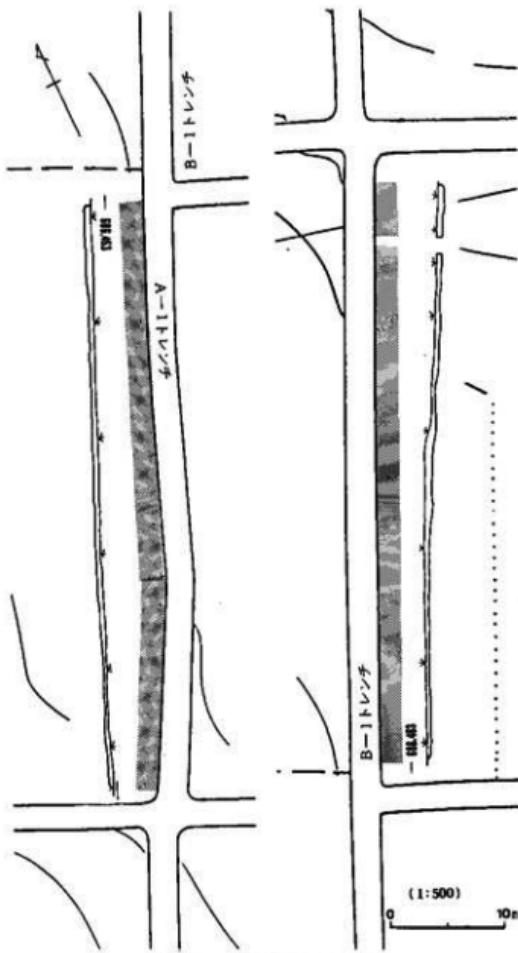
伊勢並地区（ISE）

伊勢並遺跡は、先土器時代から平安時代までの遺跡とされており、遺構の存在する可能性が高いと思われたが、今回の調査地区においては遺構の検出はなく遺物の出土もこれというものはない。表面採集による

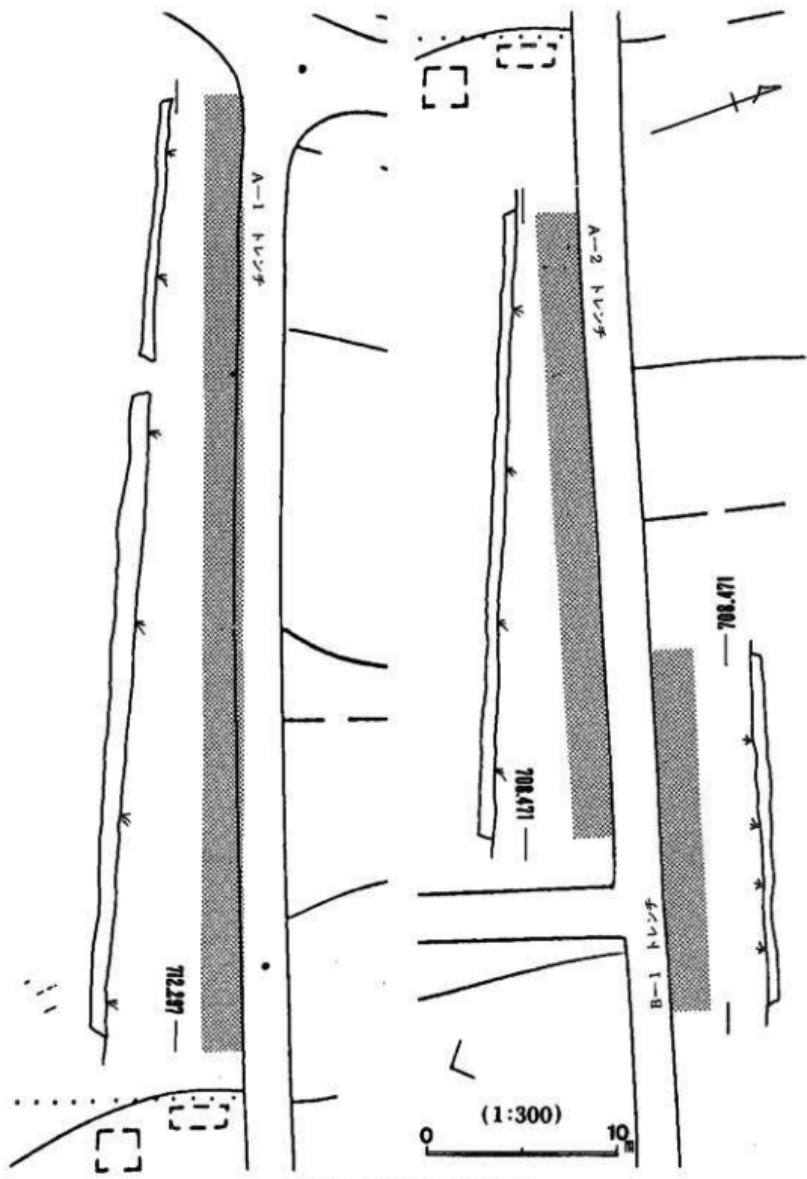
分布調査や聞き取り調査によれば、遺跡としての存在性はかなり高いものがあると思われる。A-1 トレンチに地質調査坑（第9図No.3地点）を設定した。

遺物については次のとおり。

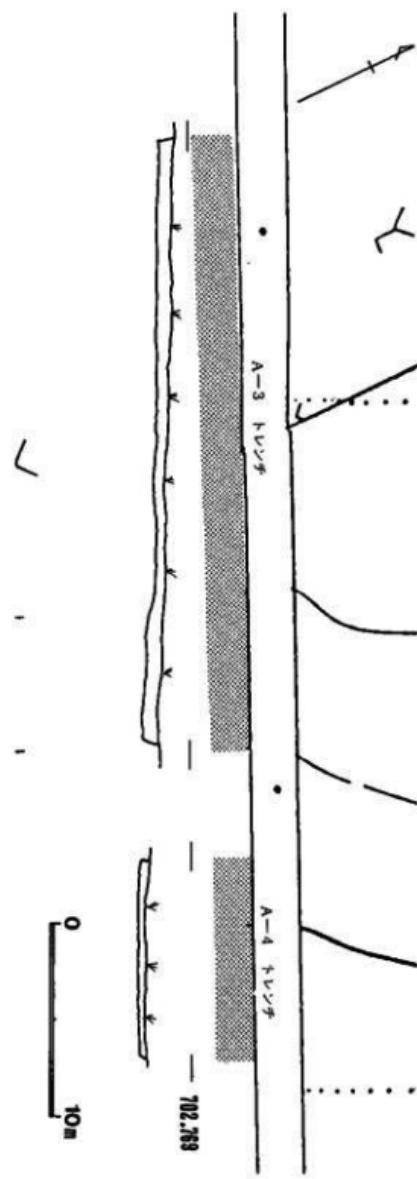
- 1 A-1 トレンチ覆土より出土した縄文時代後期の横位羽状斜線文の施された口縁部土器。
- 2 表面採集による打製石斧
- 3 表面採集による叩石
- 4 表面採集による叩石



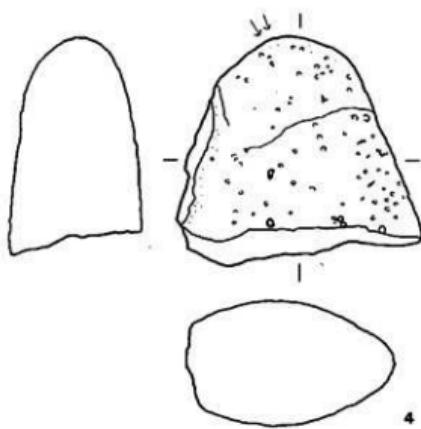
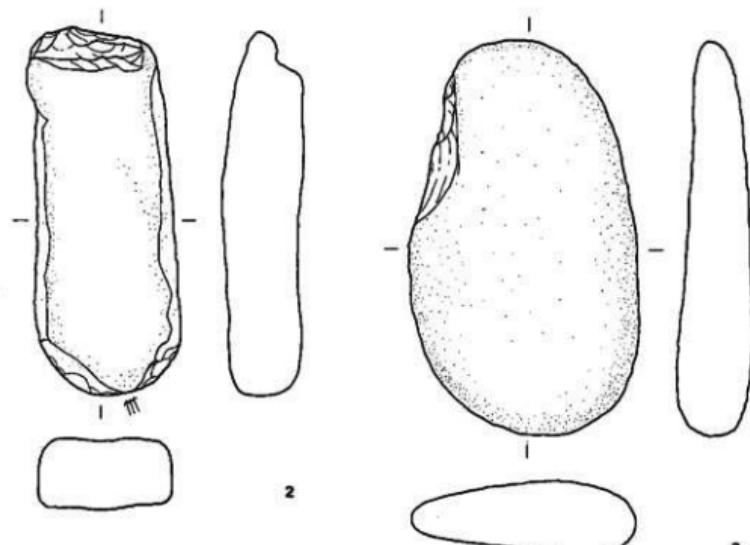
第20図 小黒南原地区調査範囲



第21図 伊勢並地区調査範囲(1)



第22図 伊勢並地区調査範囲(2)



第23図 伊勢並地区出土石器実測図 (1 : 2)

まとめ

畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区が実施されるに伴う埋蔵文化財の緊急発掘調査にあたり、調査の中で知り得た二、三の問題点を述べてまとめとしたい。

小黒南原・伊勢並遺跡の両遺跡は、過去において伊那市教育委員会や考古学に關係している多くの方々によって事あるごとに発掘調査や分布調査がなされてきた遺跡である。それだけに今後に対する問題点も多い遺跡でもある。

今回の調査は、この両遺跡において土地改良事業にかかわる道路拡張部分について行われた。調査は道路の拡張部分について幅2mのトレンチを設定し、小黒南原地区から調査を始めて伊勢並地区へと順次進めていった。調査の成果は前項記述のとおりである。

今回の発掘調査に伴いこの地域が旧石器の遺跡でもありそれに地形的な面で有名な小黒川断層も遺跡周辺に存在するので、これに關係する地形・地質の調査も合わせて行いたいと考え、第四紀学会会員の松島信幸先生・寺平宏先生のご協力を得ることができた。調査された地形・地質の内容の詳細については第Ⅱ章第三節に述べられているのでそちらをご覧いただきたい。

地形の面で特に小黒川断層は日本的な活断層として知られている断層であるが、一般的にはあまり知られていないようである。この小黒川断層の変位基準年代は3~2.7万年頃とされ、この間の垂直変位量は13mに及ぶ断層である。この断層の活動度はA級といわれているので、今後特に注目すべき断層のひとつである。

また、今回の調査においては地形調査と並行して地質の調査も行われた。この地質調査は、今後の旧石器の時代を決定する上でも、今日の考古学の研究の上でも欠くことのできない調査のひとつであり、特にこの地域に旧石器時代の遺跡が存在することからも、今回の調査において大変重要なものとなった。

小黒川扇状地の礫層の上部を覆っているテフラについて、小黒川左岸段丘の上流部①小黒川断層の露頭②トレンチにおける調査坑③小黒川断層の下の西町の面④⑤は小黒原東側地点などの調査を実施した。その結果地表下50~75cmの下部に御嶽火山灰中に始良Tn火山灰(約2.5万年前)の火山ガラスが含まれていることが確認された。このことは、旧石器の時代を研究するのに貴重な資料と考えられるところである。西町城南町のテフラの最下層には三岳スコリア5.7万年の層がみられ、小黒川扇状地では一番古いテフラ層となる。こうして今回の調査では小黒川左岸段丘の上流より天竜川にいたる間の主要な箇所のテフラ層の柱状図の作成ができたことは大きな成果であった。

今回の調査地域には狐塚北古墳・狐塚南古墳・八人塚古墳が存在するが、狐塚南古墳は昭和50年に土取り工事のため発掘された。出土遺物からすると6世紀代後半の古墳である。八人塚古墳については伊那市史歴史編のなかで2基が掲載されている。ひとつは消滅古墳となってお

り、今回の調査で2基の八人塚古墳について確認ができなかつたので、今後研究調査していきたいと考えている。

伊勢並遺跡周辺にはこれだけの古墳が存在しているが、これらの古墳が築造された6世紀代の集落が確認されていないので今後これらの集落の調査研究が必要と考えられる。

延喜の東山道については、最近の東山道研究で春日街道沿いの説がかなり有力視されているところから小黒南原・伊勢並遺跡の両遺跡を通っている春日街道筋は注目すべきと考えられる。今回の調査においては遺物の出土がなかったのは残念ではあるが、今後の調査と研究に期待がかかるところである。

終りに長野県教育委員会文化課、上伊那地方事務所土地改良一課、伊那市教育委員会教育長をはじめとして社会教育課職員の方々にはいろいろとご指導ご協力を賜り、厚く感謝を申し上げる次第である

調査団長　友野良一

あとがき

このたび、畠地帯総合土地改良事業伊那西部地区が実施されるにあたり、小黒南原遺跡・伊勢並遺跡の緊急発掘調査が行われました。

冬期における発掘調査で、絶大なるご尽力を賜りました発掘調査団長、調査員の先生方、作業員の皆様には感謝に絶えない次第であります。

今回の発掘調査におきましては遺構の検出がなく、遺物の出土も極めて少數でしたが、地形地質調査・歴史的環境調査など調査の成果につきましては今後の社会教育活動の一環として報告していきたいと考えている次第であります。

社会教育課長　小田切　修

参考文献

長野県史刊行会	「長野県史」考古資料編 全1巻 (三)	(1981)
伊那市史刊行会	「伊那市史」歴史編	(1974)
上伊那教育会	「上伊那誌」歴史編	(1965)
上伊那教育会	「先史及び原始時代の上伊那」	(1926)

図 版



小黒南原地区



伊勢並地区

図版2 小黒南原地区



A-1 トレンチ
(南から)



B-1(1) トレンチ
(北から)



B-1(2) トレンチ
(南から)



A-1(1)トレンチ
(西から)



A-1(1)トレンチ
(東から)



A-1(2)トレンチ
(西から)



A-1(2)トレンチ
(東から)



A-2 トレンチ
(西から)



A-2 トレンチ
(東から)



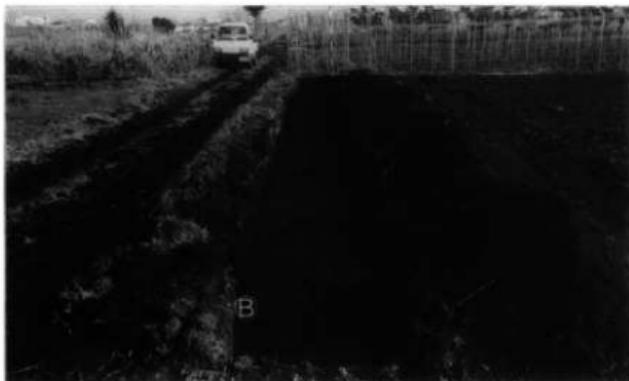
B-1 トレンチ（西から）



A-3 トレンチ（東から）



A-3 トレンチⒶ部分断面



図版7 伊勢並地区出土遺物



A-1 トレンチ出土土器



表探石器



表探石器



表探石器



狐塚北古墳



狐塚南古墳



八人塚古墳



八人塚古墳



横手道からの切り通し口



切り通しより北方を望む



春日街道といわれている横手道



小黒川左岸段丘に上がったとされる場所

小黒南原・伊勢並遺跡

—緊急発掘調査報告書—

平成4年3月 発行

発行 上伊那地方事務所
伊那市教育委員会

印刷 小松総合印刷所
